

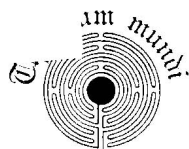


種村季弘のラビリントス

影法師の誘惑

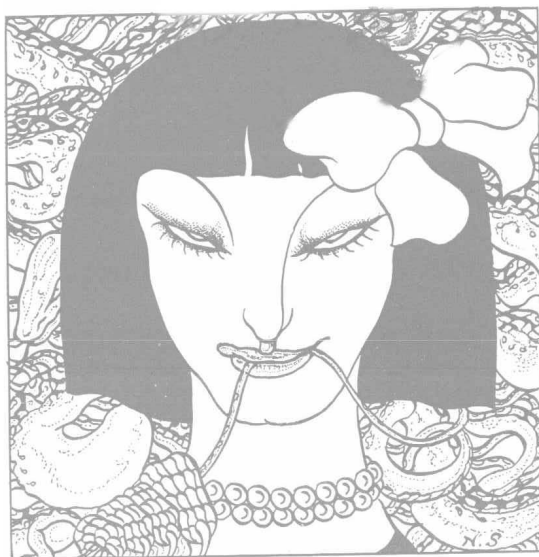


青土社



種村季弘のラビリントス

影法師の誘惑



青土社

影法師の誘惑

種村季弘のラビリントス②

©1979, Suehiro Tanemura

昭和五十四年四月二日 印刷

昭和五十四年四月十日 発行

定価——一六〇〇円 1380—900026—3978

著者——種村季弘

発行者——清水康雄

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町一—二九 市瀬ビル 下101

(電話) 二九一—九八三一 (編集) 二九四—七八二九 (営業)

(振替) 東京九—一九二九五五

印刷所——松沢印刷

製本所——鈴木製本

扉絵——杉本典巳

影法師の誘惑
目次

I 少女

小妖精アリス 11

シンデレラの靴 13

少女論 29

アリスの肖像画家たち 37

遊戯の規則 48

II 人形

人形幻想 77

人形貴種流離譚 82

器具としての肉体 100

ある人形破壊者の白日夢
107

人形の解剖学者
118

Ⅲ
幻燈

魔術時代の終焉
141

影法師の誘惑
163

幻想の時計師
177

暗箱の花咲ける洞窟
186

Ⅳ
玻璃

タロットの秘密
193

現代の妖怪
207

和洋怪談比較考 220

面白い小説のからくり 226

つげ義春の退行的ユートピア

232

一枚の銅版画から 237

V 幼年

長広舌讃 251

十二階の崩れた日から 261

文学以前の世界 278

VI 睡眠

求む装飾用隠者 291

睡眠者の全知 298

赤い靴 306

水中影変幻（あとがきにかえて）

309

初出紙誌一覧

315



影法師の誘惑

I

少女

小妖精アリス

いったい、この少女はどこからやってきたのだろうか？

もう誰も住んでいない、どっしりとしたヴィクトリア朝時代の家具が幽霊のようにあたりを取り囲んでいる、古ぼけた廃屋の一室の鏡のなかから抜け出してきたのだろうか？

それとも雲突くような巨人や、栗鼠や野兎ほどの大きさの矮人^{こびと}や、バックとかエルフとかというような不思議な妖精たちが戯れ合っている緑の庭園から、狂った時計の針につれてこ

の世にさまよい出てきてしまったのだろうか？　あるいはまた、絵本のなかの古いお城の塔の上から縄梯子づたいに逃げ出してきたのであろうか？

危いぞ、と私はひとりごちるのである。そんなに無邪気に笑ったり、そんなに貴婦人みたいにツンとお澄ましをしたり、そんなに惜しげもなく小妖精めいた裸身を披露したりしていると、君は誘拐されやすい、誘拐されたがっている少女みたいに思われてしまうぞ。

案の定、彼女の身の回りには、大男や奇妙な双生児の兄弟や、小さな動物たちが、美味しいお菓子の匂いを嗅ぎつけたようにやってきて、クンクン鼻を鳴らしているのである。

あのロンドン名物の大時計ビッグ・ベンの小父さんでさえ、大きな図体をすり寄せるように傾けているではないか。でも、大丈夫。彼女と話を通じるのは、童話の国の住人たちだけなのだから。こんなに誘拐されやすそうな女の子が、人間にだけは絶対に誘拐される心配がないのである。

シンデレラの靴

十八世紀フランス破廉恥三人組の一人、レティフ・ド・ラ・ブルトンヌが、かくれもない足フェティリストであったことはよく知られている。その名も『ファンシエットの足』という作品を出世作としてデヴェューシ、長大な『ムッシュウ・ニコラ』のなかでくり返し小妖精フェアリーと足とにたいする愛を告白した、レティフの足フェティズムについては、すでにハウロック・エリスによって精細な分析が捧げられているが、この十八世紀のナボコフともいうべき作家の足(靴)フェティズムは、徹頭徹尾、特異な少女崇拜趣味に結びついていたらしい。レティフが愛したのは、ほとんど少女たちの足と靴にかぎられていたが、有名なコレット・パランゴン夫人にたいする熱愛さえ、典型的にロココ風な少女崇拜と無縁ではなかった。彼が十八歳で徒弟奉公に入った先の印刷屋の若妻であったパランゴン夫人は、黄蜂のようにくびれた腰と少女の足をした永遠の妖精であり、現実には年長者であったとはいえ、

その「緑の踵をした薔薇色の靴」は、レティフにとっては、小妖精の履き物にほかならなかったのである。

もちろん、恋愛における美しい足の魅力の重要な役割については、カザノヴァも語ったし、ゲーテ（『親和力』）も語った。川端康成の『片腕』とともに、わが国フェティシズム文学を二分する谷崎潤一郎の仏足石についてはここにあらためていうまでもないであろう。しかしもし、近代にかぎって、レティフと比肩するフェティシズムの心理家を挙げるとすれば、私には『グラディーヴァ』の作家ウィルヘルム・イェンゼンが、ただちに念頭にうかぶ。

一九〇七年、ユングの推奨によって、このドイツ世紀末の詩的レアリストの作品を読んだフロイトは、ただちに『ウィルヘルム・イェンゼン「グラディーヴァ」における妄想と夢』を書いてイェンゼンを顕彰した。しかしイェンゼンの作品とその女主人公の放つふしぎな魅惑の牽引力は、さらに四半世紀後、アンドレ・ブルトンと超現実主義者グループにも及び、ブルトンは『通底器』の冒頭に、ジョルジュ・サドゥール訳による『グラディーヴァ』の一節をかかげるのである。ちなみにブルトンがいかにこの作品に惹かれていたかは、後年彼がセーヌ街に「グラディーヴァ画廊」という名の画廊を開設したことにあきらかであろう。ブルトンが引用している箇所は、作品末尾のたぐいなく美しい一節である。

「……やがてグラディーヴァの再生たるツォエ・ベルトガングは、左手でドレスの裾をかるかと捲りあげると、ハノルトの夢みるような視線に包まれながら、さんと陽光のふりそそぐ石畳の